

視 察 ・ 調 査 報 告 書

< 土 木 環 境 委 員 会 >

令和5年第1回沖縄県議会（2月定例会）閉会中

自 令和5年5月30日（火曜日）

至 令和5年5月31日（水曜日）

沖 縄 県 議 会

土木環境委員会視察・調査報告書

視察・調査日時

令和5年5月30日（火）及び同月31日（水）

※台風接近のため日程を1日繰上げ

視察・調査場所

福岡県（大野城市、太宰府市、北九州市）

視察・調査事項

- 1 公害防止及び環境保全について
（国立自然史博物館の誘致に向けた取組事例について）

視察・調査概要

別添のとおり

参加委員（11人）

委員長	呉	屋	宏
副委員長	下	地	康教
委員	仲	里	全孝
委員	座	波	一
委員	玉	城	健一郎
委員	島	袋	恵祐
委員	比	嘉	瑞己
委員	崎	山	嗣幸
委員	新	垣	光荣
委員	金	城	勉
委員	照	屋	守之

議会事務局（2人）

議会事務局政務調査課主幹	上運天	慎也
議会事務局政務調査課主査	宮里	正樹

別添（視察・調査概要）

1 調査事項：九州国立博物館の誘致活動と開館後の役割について

(1) 概要説明（大野城心のふるさと館 館長）

九州国立博物館開館の7年前の1999年からMuseum Kyushuという機関誌の編集委員として、国立博物館の誘致に携わった。当時、国と地元の費用負担割合を5：4：1とする話などは、スタート時点で間違えると後々大変なことになると感じていた。その点、北海道のウポポイ—国立アイヌ民族博物館は、全て国の負担で造っており、本当はそのような形がよかったと思う。

九州国立博物館の敷地は周りを緑に囲まれているため虫が多く、本当は文化財の保存にとってはあまりいい環境ではない。

太宰府天満宮の社有地14万平米が寄贈された後に3万平米を福岡県が購入している場所である。

文化庁が設置した3つの国立博物館は、もともとの帝室博物館—天皇家と関わる物を展示していたところで、首都があった東京、京都、奈良にのみ置かれた。

約100年の歴史があるが、その3つの国立博物館の弟分として当館は4番目の国立博物館である。

21世紀の博物館として、とにかく新しい博物館を造ることが課せられた使命だった。一番大きかったのが国と地域で造る博物館、これが九州国立博物館の特徴である。大変なハードルであったが、今となっては大きな特色となった。国と地域で造ると簡単に言うが、なかなかそう簡単ではない。

開館に向けてはとにかく物がなく、収蔵品がゼロからのスタートだった。展示に当たって他の博物館等から借り受ける場合、美術資料だと1年間に2か月しか展示できないため、1年間展示を維持するためには同じ物が6つ必要となり、そういうことにとっても頭を悩ませた。今もいろいろなところからお借りしたりしながら、展示室を維持している。

21世紀の博物館として、一



【館長による説明】

一番大きいのは来館者サービスである。20世紀の国立博物館は、展示ケースの中にお宝を置いて、見せてやるというような展示の仕方であった。国立博物館は2000年頃に独立行政法人に変わったが、国立の機関が急に変わることは難しく、設計は既に終わっていて、建物も昔ながらの運営方法を予定したものであったため、例えばボランティアやサービスを行う部門の人たちの部屋がないなど、本当に苦労した。

結論から言うと、県民や市民の皆さんが楽しむことができる博物館でなければ、生き残れない。自然史博物館はどうしても研究型になりがちだが、サービスの部門がしっかりしていないと立ち行かないと思う。地元の人が行かない博物館は意味がない。最初からそのくらいのつもりで、研究型と観光型、地元の皆さんが喜ぶような県民サービス・市民サービス、そういう3つのバランスが取れるようなことを、常に念頭に置いたほうがよい。

国立博物館の誘致の経緯については、まず明治時代に、ヨーロッパで列強が帝国主義的にいろいろな植民地からたくさんの物を持ち込み、それを一般の人たちに見せて力を誇示することがはやり始めていた。日本においてもウィーン万博への出品のために事前に開催したのが湯島聖堂の博覧会であり、それが常設になったのが国立博物館である。

そのような時期の明治6年に、かつて九州を統括していた役所が存在し、対外交流の窓口及び本土防衛の拠点であった太宰府の昔日の繁栄をもう一度よみがえらせようとのことで、太宰府天満宮で博覧会が開催された。これが大評判になり翌年、翌々年と連続開催され、それを機に鎮西博物館構想が生まれ、明治26年に福岡県及び内務大臣に上申されたが日清戦争勃発により計画中止となった。

次の大きな動きとしては、福岡日々新聞——後の西日本新聞社が、美術界で著名な岡倉天心にインタビューし、鎮守博物館の必要性を説くという記事を載せたことにより、議論が本格化し、衆議院で九州博物館設置に関する建議案が可決され、かなり動きがまとまったが、昭和2年の時代背景もあってか建設に至らなかった。

また、昭和22年に長崎市が文部大臣に市立博物館を国立博物館にしてほしいという請願を行い、文部省も予算計上したが、長崎市が当面は原爆で被災した場所の復興が大事だということで、計画自体を返上してしまった。長崎が不調に終わったことを受けて、福岡県が名のりを上げ、県議会が帝室博物館分館の福岡への誘致を可決したが、これも不調に終わることになった。

再度、動き出したのは昭和41年に明治維新百年記念準備会が設置され、

新しい国立博物館を造る方針が出たことで、福岡と奈良が手を挙げた。このときは行政も動き、福岡県教育委員会社会教育課の中で国立博物館設置期成会という誘致のための団体をつくり、官民一体で動いたが、結果として成田空港対策により、千葉県佐倉市に内定した。

国立博物館設置期成会ができたことにより、運動自体はそのまま継続し、太宰府天満宮が建設用地を正式に寄附したことで、県としては何とかやらねばということになり、県立の歴史資料館ができた。

その後、官民一体となって博物館等建設推進九州会議ができた。この九州会議は、国が国立の文化施設を整理するというを受けて、西日本新聞社が母体となり、七社会と呼ばれる九州の名立たる会社の参画により発足した。その中でも西日本新聞社の役割が大きく、あしたにでもできるような感じで、ほぼ毎日のように九州国立博物館の記事を載せた。

また、その九州会議で運動の広がりや形にし、継続するための広報誌として Museum Kyushu を発刊したことにより、どんな博物館を造るのか、どういう姿になるのかが少しずつ形になっていった。

これはとても大事なことで、ただパンフレットに意気込みだけを書いて、観光のために、地域振興のためにとっても国は動かない。具体的に何をしたいのかをまとめていく必要があり、この Museum Kyushu が、大変大きな役割を果たした。

1988年には官民で九州国立博物館誘致推進本部という団体がつくられた。行政体が団体に補助金を出して、動きやすい組織をつくり、官民一体で本格的に動きが始まった。

一番大きかったのが、国会議員の中で九州国立博物館を支援する議員連盟ができて、かなり大きな動きになっていったことである。九州沖縄地区の全ての国会議員が超党派でこの議連に入ったことでバックアップとなり、1996年、ついに太宰府に設置が決定した。

県議会の動きとしては、昭和63年に福岡県議会が国立博物館誘致対策調査特別委員会を設置した。その3年後には、この特別委員会委員が九州各県議会に行き、協力要請をした。

議会が本格的に動き始めたことは大変大きく、各県の協力を



【説明を受ける】

取り付けることは、行政ではなかなかできない仕事であり、これがバックアップになった。

なぜ明治からずっと要請を繰り返しても、なかなか実現しなかったのかというと、結局、国にとっては必要ではなかったということである。公立博物館があるのだから、別に国としては造る必要はないというのが基本姿勢で、学者が言っているだけだと、このようものは九州で造ったらよいではないかという言い方である。

国立博物館を造るに当たって、一番大事なことは国民の盛り上がりである。それがなければ政治家も造る必要はないということになる。九州国立博物館ができた要因は、やはり盛り上がりがあったということである。また、組織的に行われるような官民の団体ができていたこと。さらに国に対して官民それぞれが説得をしていて、財務省には地元負担とかいろいろなことを約束をしていったということである。そして設置理念や、国がなぜ必要とするかも含めて、全てペーパーを用意した。

もう一つの要因としては、設置場所が太宰府であったことが大きい。これがもしも福岡市であったならば、恐らくどの県も賛成しなかったと思われるが、太宰府なら仕方がない、アジア文明、アジアとの交流の博物館というコンセプトからも、やはり太宰府であろうということがあった。

また、諦めずにずっと運動が継続していたこと、継続した運動を目に見えるようにすることが大事である。特にM u s e u m K y u s h uという機関紙が、運動を目に見える形にすることで大きな役割を果たした。

地元がとにかく動いたことも特筆される。青年会議所が新聞に全面広告を出したり、市民団体の九州国立博物館を誘致する会が100円募金で車用ステッカーを配布した。

開館に係る費用については、総額250億円のうち、国と県と民間で5対4対1の費用負担となり、募金活動により、約41億円の寄附が集まった。今でもその募金を基にした活動が行われている。

機関誌M u s e u m K y u s h uは、歴史だけでなく自然史やアジアの地域史博物館など、様々な特集を年に3回から4回出していった。九州大学の教授や博物館の学芸員が、毎月1回集まっているいろいろな企画やテーマを考える。こういう組織があったから、国から博物館の骨格を示してほしいと言われたときにも、この編集委員会で検討すればよかった。中身についての相談ができる場所があり、講演やボランティア団体との交流もできる。この編集委員会がそういう役割を果たしたことは大変大きかった。

国立博物館ができて一番よかったことは、地元との関係が非常に良くな

ったことである。地元の誇りになったということが一番大きい。それを支える人がいることで、地元も盛り上がる。特に小中学生など、とにかく地元を大事にすることが、博物館で花開いた。

(2) 質疑応答

Q 国を納得させる設置理念を、編集委員会や専門家がつくったとのことであるが、沖縄において設置理念をつくり上げていくには、どうすべきか。また、収蔵品の収集やその原資をどうすべきか。

A 設置理念は、観光や地域の発展など考えられることはいろいろある。沖縄の地の利などは、学者の皆さんが種の保存だとか、環境の問題とか、いろいろなことを考えてくれると思うが、県民の誇りになるような施設が必要だということである。

理念を国が納得するかについてはいろいろあるが、何がどう動くか分からない。国はいつ動くか、どんな風が吹くかは分からないので、常に準備をしておく必要がある。官僚、政治家の物差しに合わせない限りは誰も納得してくれない。国の中に架け橋になるような行政の人を研修生として置いておくなどして、国の物差しを早く知るようにすることもテクニックとしては必要になる。大きな流れが来て、政治の中で決定することがあるが、問題はそのときに動けないと全部御破算になる。

収蔵品については、少しずつ集めていけばよい。九州国立博物館も年間で5億円ぐらい購入している。借用したり、各大学や、研究所などいろいろなところの協力を得ながら、少しずつみんなを集める。その分野の人間が入ってくれば大丈夫だろうと思う。

Q 建設費の負担割合について、国が5割、県が4割、民が1割とのことであるが、他の博物館も同様か。維持管理費は自分たちで見ているのか。

A そのような形が増えてきているが、北海道の国立アイヌ民族博物館の場合は恐らく全額国費だと思う。福岡の場合は、何か取引する



【質疑応答】

ような材料もなく、とにかく設置してほしいということであったので、それならば何か地元も出せるものがあるのかというのが当時の財務省の言い方であった。それで地元も5割、国が5割でおおむね了解され、地元の5割のうちの4割が県で1割が民間となった。

バブル当時の構想では、民間が100億を集めればその利子で運営費はほぼ賄えるという考え方があったがバブル崩壊後はそれはなくなった。

Q 九州会議の発足が、大きな転機だと思うがどうか。

A 誘致に当たっての勝利の方程式がある。それは運動体——文化人、経済人、学者も含めて、それが1つの回路として、運動体が動き始め、いろいろなシンポジウムや誘致活動をする。そうすると市民が動き始め、市民が動き始めると政治家が動く。政治家が動いたら役人が動かざるを得ない。周りの市民を巻き込んだところの広がりが一番大事である。

Q 沖縄では日本学術会議の提言があり、誘致活動が起こっていることから、アドバンテージは非常に大きい。沖縄も学術会議の提言を踏まえ、九州も巻き込んで、日本全体が沖縄に造るべきという機運を盛り上げる必要性を感じたがどうか。

A そのとおりである。M u s e u m K y u s h uを、関連するほとんどの文系大学に送っていた。学会に行くと、ほぼ全国の学者が国立博物館の誘致の動きを知っていた。文化人についてもM u s e u m K y u s h uに寄稿することで、一般の人向けに配布されるということで、大変信頼を得たことも大きかった。

県議会についても、九州各県を行脚して了解を取りつけたことで九州各県の議会も知るようになったことも大きい。ぜひ議会が先頭に立っていただきたい。

Q M u s e u m K y u s h uの発行部数はどのぐらいか。

A 千の単位で、とにかく全国の大学、研究機関、文化施設、博物館に配布された。一般の人には新聞社で販売していた。発刊の際は必ず新聞に記事が出ていた。一般向けというよりは、文化人、学者向けの機関誌といった感じである。病院等にもかなり配布しており、ものすごくお金がかかった。

Q 沖縄で気になるのは民間、県民の盛り上がりがこれからであること。それが一番大きな鍵を握ると思うが、どのように九州全体を盛り上げていっ

たのか。

- A 西日本新聞社の役割が大きかった。何かあると国立博物館の動きをすぐ載せた。西日本新聞の購読者はあしたにでも国立博物館ができるのではないかと思うような形であった。

取り上げられるには、いろいろなイベントをやるしかない。講演会やシンポジウムが広報されていることで、新聞、テレビで一般県民が知ることになる。市民の盛り上がりの中で、例えば5円のシールとか寄附を含めて、地味であるがそういう盛り上がりがあると違って来る。

- Q 九州国立博物館の誘致については、明治のころから百何十年という歴史が背景にあるが、沖縄の自然史博物館の誘致については10年計画でという考えがある。九州の例と比べると無謀とも思えるような計画であるが、このスケジュールはどう受け止めているか。

- A 九州国立博物館の一番根本にあったのは太宰府天満宮であり、宮司の熱意がずっとつながってきたことが大きい。100年というが、その時々で変わっていくので、10年20年スパンでいいと思う。

始めるときはいつまでになるか分からない。Museum Kyushuの編集委員会に関わっていたときは、できるとは思っていなかった。

いつ風が吹くか分からないから、常に備えておくということであり、運動は無駄にはならない。今始めて、10年後か、100年後になるのか分からないが必ず実を結ぶと思う。



【質疑応答】



【館内視察】

2 調査事項：九州国立博物館について

(1) 概要説明（九州国立博物館副館長兼福岡県立アジア文化交流センター所長）

九州国立博物館は、平成 17 年 10 月に開館し、開館の翌年には「うるま ちゅら島 琉球」そして 7 月には「南の貝のものがたり」という沖縄県の歴史や文化を紹介した特別展を連続して開催した。今年の夏には沖縄県の皆様とともに沖縄復帰 50 年記念特別展を開催したところである。

九州国立博物館の誘致については、2 回大きな節目があった。

まず、昭和 46 年 3 月の国立九州博物館設置期成会の発足である。このときは明治百年記念事業で国立の民族博物館を造ろうということを国が表明し、太宰府が手を挙げたときに県が受皿として九州歴史資料館を造った。あわせて太宰府天満宮が隣接する 14 ヘクタールの土地を寄贈した。

次に、昭和 55 年に博物館等建設推進九州会議が発足して、県議会にも国立博物館の特別委員会がつくられることになった。

そういう中で、国が専門の調査委員会をつくることになったが、地元でも太宰府市に誘致をしようという取組をしていく中で、平成 8 年に設置候補地の決定につながったというのが大きな流れである。

施設の概要について、建物敷地面積が約 16 ヘクタール、延床面積が約 3 万平米、建物の大きさが 160 メートル掛ける 85 メートルで、3 つの免震構造を組み合わせて地震の揺れを逃がしている。その免震層の上に収蔵庫、3 階、4 階に展示スペースを配置している。

特徴としてはガラス張りであること。ガラスは紫外線を通し、結露があるため博物館にはあまり使われないが、当館はガラスとガラスの間に 1.5 メートルの間隔を設けて二重ガラスにして結露と紫外線を防いでいる。周りの山々の風景がガラスに映ることで、自然に溶け込むような建物にしている。

組織について、非常にユニークな運営形態として、独立行政法人国立文化財機構と県が連携協力して事業運営をしている。国立文化財機構は、東京、奈良、京都の国立博物館などを所管する行政法人である。総務部門、展示部門、文化財の保存や修復は国が所管している。県は、広報部門、展示部門、交流部門、教育普及活動、ボランティア、他の博物館との連携や国際交流という、地元が所管したほうが効率的なものについては県が所管している。非常に高度な専門性が求められるものは国が所管し、展示、企画は一緒にやるというような組織である。

入場者数については、コロナ禍で大変少なくなり、令和 4 年度は 53 万

5000人で、コロナ禍前の6割ぐらいである。多い年は、年間100万人近く入っていた。

展示について、文化交流館は5つのテーマで常設の展示をしている。展示面積が3900平米で高さが7メートルの展示室になっている。

特別展は年4回行っており、去年は「琉球」を開催させていただいた。

教育普及活動については、バックヤードツアーや、きゅーはく号という車に展示物を積んでアウトリーチで展示する活動、1階のあじっばは子供たちの体験学習を行うなどのいろいろな取組をしている。

国際交流について、当館はアジアとの交流をテーマとする博物館であり、アジアの博物館等と学術文化交流協定を締結して、学芸員の交流や、共同での調査・研究、展示物の貸し借りなどを行っている。

保存修復については、X線スキャンによる文化財調査や、補修用の紙を作ったり、古文書、書籍、典籍、絵画、彫刻、考古、漆工の修復を6つの文化財保存修復施設で行っている。

地域との連携については、太宰府天満宮や、地元の市町村、博物館等と連携して、様々な事業、イベント等も行っている。また、今248名のボランティアがいる。任期は3年で1回だけ延長でき、通算6年間で次に交代していくというシステムになっている。



【副館長による説明】



【説明を受ける】

(2) 質疑応答

Q 組織について、研究している方や学芸員はどこに属しているか。

A 国の学芸員が所属しているのは企画課、博物館科学課、文化財課になる。県の学芸員は展示課と交流課に配置している。

Q 国、県の役割分担について、これだけの博物館を運営していくためには相当な予算がかかると思うが、これは国も県も負担をしているということか。博物館の維持管理経費はどれぐらいか。

A この建物の建設費用は 227 億円かかっており、そのうちの半分を国が負担して、4 割を県が負担し、残りの 1 割は、誘致の際に経済界がつくった財団が 45 億円の寄附を集めた中から 25 億円をいただいた。トータルすると、国が 5、県が 4、財団が 1 で建設をして、博物館運営に要する経費についても、国が 6、県が 4 ぐらいの負担となっている。維持管理経費は年度によって異なるがおおむね年間 20 億程度である。

Q 国立博物館ができて九州の方々の意識は変わったか。

A 地元は博物館を盛り上げていこうということで、意識が変わっているが、九州全体で見れば国立博物館が太宰府にあるということをまだ知らない方も結構いる。太宰府にあるということをいろいろな形で、特に九州の皆さんに伝えていきたい。去年は種子島の特別展などを行った。九州のいろいろなところに、この場所で PR しませんかという声かけをしている。

Q 展示品の移動はどのように行っているか。全国 6 か所から移動して展示しているのか。

A 常設展と特別展示があるが、特別展によっていろいろな美術館・博物館から借りてきて、移動する形になる。また、お寺や個人が所有するものも結構ある。そういうものはそれぞれ専門の業者のトラックに学芸員が同乗して、それを借りて展示し、展示期間が終わったらまた同様に学芸員が同乗してお返しに行く。もちろん、積み込むときとお返しするときは、どこか痛んでいないかなどを確認する。

Q 九州国立博物館を愛する会は、博物館設立に当たって非常に重要な役割をして、なおかつ現在もその団体がバックアップしているということだが、博物館の特色であるボランティア活動と関係しているのか。または企業からのボランティアもあるのか。

A ボランティアについては、基本的には募集・選考して毎年 200 名ぐらいの方が新しく入ってくる。3 年経過後に意思確認し、継続希望の方はもう 3 年できるということで今第 5 期と第 6 期のボランティアが活動している。

九州国立博物館を愛する会については、もともとこの博物館を誘致する

ときに地元としてもいろいろな形で博物館の誘致に力を貸したいということで、最初は誘致をする会という名前であった。それが支援する会になり、今は愛する会という名前になっているが、その当時の皆さんがずっと継続して、博物館のいろいろな事業をサポートしていただいている。例えば花のプランターを置いてもらったり、子供のイベントなどの取組を毎年行っている。

Q 子供と高齢者を無料にしていることはすばらしいと思うが、経営的にはどうか。

A 博物館については高校生以下は無料になっている。入館料としては今は700円だが、料金収入だけで運営できる状況ではない。

博物館がどうあるべきかとも関連するが、博物館があることで観光や、雇用などの経済効果もあるということで外国の博物館は入場料が無料のところも多い。

Q 博物館の設置に当たり、こういうことはやらないほうがいいのかがあるか。

A たくさんあるが、お客様の声で多いのは駐車場が遠いとか、駐車場から歩いてくるのは暑いという声を多くいただく。

駐車場が離れており、ぬれずに移動できるようにしておけばよかったが、今となってはどうしようもない。細かいところでもいろいろある。



【質疑応答】



【質疑応答】

3 調査事項：国立沖縄自然史博物館の設立構想について

(1) 概要説明（北九州市立自然史・歴史博物館 館長）

当館は北九州市が造った市立の博物館であり、昨年 20 周年を迎えた。開館時はバブルで予算があった時期で、市も頑張って大きなものを造った。もともと自然史、考古、歴史の小さな博物館があり、その 3 つを統合したものである。

入館者は年間 50 万人程度である。メインターゲットは地元の子供たちで、リピーターも多い。修学旅行は県外が多く、九州から広島ぐらいまでの団体が来場する。また、小中学校のカリキュラムの中で見学に来るところも多い。

この場所は駅が近く、バスも便利であり、そういう利便性は必要である。車でしか来られないという博物館が全国に結構あるが、そうすると子供が自分たちだけで行くことができない。親と来るとなると土日しか来られない。

しかし当館は駅が近いため、中学生ぐらいだと自分たちだけで来ることができる。また近くに環境ミュージアムがある。以前はそこにスペースワールドという遊園地があった。今はそこにスペースラボという科学館があり、大型ショッピングモールもあるなど、家族向けのいろいろな施設が集中しているのがメリットである。

一方で周りにあまり自然がないため観察体験ができないという点はあるが、やはり交通の便がいいのは絶対的である。沖縄においても観光の方はレンタカーがあるが、地元の子供たちが気軽に行けるいうことであれば、交通が便利なところがよいと思う。沖縄県立博物館・美術館も便利なところにあるように、誰でも行けるといえるのは大事である。

また、当館は海外からのお客さんが結構多い。JICAの事務所が近くにあることや、やはり北部九州は韓国と近く直接定期船も来ているため、韓国からのお客さんがかなり多い。沖縄は台湾や中国、欧米の方たちも含めてもっと多いと思われるので、英語表示の充実は必須である。

国立沖縄自然史博物館の設立構想については、最初は日本学術会議からスタートしているが、東日本大震災があり国のお金の流れが変わって止まるなど、途中でいろいろなことが起こるたびに困っている。

東日本大震災が起こったときには標本が駄目になってしまった。沖縄は災害が少なくあまり地震も洪水もないことから、そういう意味では沖縄の地に標本を置く場所を造るといえるのはリスク管理の上でもよいと思っている。

学術会議はいろいろなことを続けてきており、シンポジウムの実施や、冊子も定期的に出している。学会の場など様々なところでシンポジウムをやっており、直近では5月末に沖縄生物学会でシンポジウムをした。

シンポジウムで出ていた意見は、やはり石垣の人たちは石垣に造りたい、ヤンバルも誘致したいというのがあって、石垣が自分たちでシンポジウムをしたり今強烈に誘致の活動をされている。

ただ沖縄の場合にはいろいろな島がそれぞれに面白いので、どこかにメインのところを造るとしても、ブランチをそれぞれに造ってうまく連動するような形を私たちも考えている。石垣をメインにするとやはり観光などにはよいが、子供たちの教育などに使う部分では少し不便なところができってしまうかもしれない。ただし、候補の1つではあり、場所のことはこれからになると思う。

去年は、沖縄こどもの国で子供たちにこの話をする場があり、子供からは大きな恐竜はあるかとか、どのくらいの標本を集めるのかなど、できる前提で具体的な話をされていて子供さんもうれしそうであった。

沖縄県内で恐竜が見られるところは観光施設では存在するが、ちゃんとした骨格標本が県立博物館や琉大の博物館にもないので、子供たちは恐竜が見たいのだなと思っている。

人材の問題について、当館は自然史の学芸員が11名、歴史系が8名いる。いろいろな分野の人がいるということが結構重要なことであり、やはり人が必要になる。国立自然史博物館では100名ほど必要ではないかと考えている。いかにいい人材を集めるかということで、当館は学芸員のほかにMT——ミュージアムティーチャーと呼ばれる現役の教師と退職された元校長の方が3名いる。現場のカリキュラムとの整合性や、子供の団体が来たときの対応、出前授業での学校現場のニーズを把握する上で、このようなスタッフは確実にいたほうがよい。

標本はたまっていく一方なので実は展示スペースと同じぐらいのスペースで収蔵庫がある。

沖縄で今残念なのは、沖縄はすごく希少な生き物がたくさんいるが、戦争で焼けてしまったことから、県立博物館の自然史部門については標本を維持する体制がまだ



【館長の説明】

不十分で、標本が県外に出ている。

琉大の先生が退職する際に、国立科学博物館などに寄贈するなど、県外に出ているケースもあるので、それをちゃんと沖縄の中で維持できるとすごい財産となる。これだけの希少種がいるので、標本の収蔵庫もきちんと造っていききたいという夢はあるが、それが実現するかどうかというところである。推進している側の課題としては、とにかくまだ県民でも知らない方がほとんどであり、まして県外の方はそういう動きがあることを知らない。できるだけいろいろなところで宣伝をしようということで、学会の場でシンポジウムをしたり、子供向けや一般向け、あるいは経済界の方向けに宣伝や周知を図る活動をしているところである。

(2) 質疑応答

Q なぜ今自然史博物館なのか、なぜ沖縄なのかということをも根本的に理解した上で、進めなければいけないと思うが、専門家の立場から見解をいただきたい。

A 住んでいると沖縄のすばらしさが分からないかもしれないが、東洋のガラパゴスと言われ世界自然遺産にもなるすごい場所である。今ある自然を記録をしていく上で標本を維持するとか、それを研究するという場が現地に必要になる。今はOISTと琉大があるが、標本を管理したり、子供向けに何かをするということはなかなか難しい上に観光の方たちに説明するのもやりにくい。しかしその場が必要なので、やはり沖縄に自然史博物館が必要となる。

なぜ国立なのかと言うと、やはり規模をある程度大きく造らないと、あの自然をちゃんと記録して保存していくことができない。自然史博物館ができると標本も残るし、研究も進む、教育の上でも役立つ、もちろん観光資源にもなる。そういう場所として陸続きでもなく、かつ、日本で珍しい自然が残っている。やはり沖縄なんだと思う。最初のころは学術会議も幾つか候補があったようであるが、やはり沖縄となっている。沖縄は災害が少ないこともあり、危険分散という意味でもよいと言われている。

Q 沖縄が世界自然遺産に登録されたという意味では、ヤンバルや西表は肌で感じる場所であるが、適切な場所という意味では交通の便が一番優先されるのか。

A メインの建物が便利なところにあり、各島にその出先があるほうが運営しやすいと思う。あと観光客の方とか県民の方が来やすいところがよい。

展示施設やブランチはいろいろなところに造って、石垣の子供らはそこで勉強できるとか、ヤンバルは特に観光で来られる方も多いのでそういう方たちが勉強できる場という形。今までの日本の博物館と違って大きなものから枝葉が出たような形のもの、違うタイプのものを造るべきだと考える。

Q 子供たちが恐竜以外のものにも興味を持ってもらうため、標本を集めることは大事であると思うが、その集め方や手法はあるか。

A 琉大の先生方は研究のためいろいろな標本を集めているが、退職するときに博物館ができればそこに置く。あるいは今外に出ているものを取り戻す。港川人のことでもいろいろあったが、そういうものを沖縄にもう一度戻してもらうというようなことはできると思う。

希少種などは環境省が生物多様性センターにたくさん標本を持っているが、それは沖縄に受入先がないから持っているだけで、そういうものを戻してもらうことはできると思う。

Q 沖縄に国立として設置をすると、標本や展示物の多くを県外から沖縄に集めることになるが、交通の便などを踏まえて標本を沖縄に集める意義についてどう考えているのか。

A 基本的に沖縄は特殊な場所なので、沖縄の標本が沖縄にあるということのほうが、県民にとっても、研究者にとっても便利である。

今いろいろな標本の輸送が難しくなっており、本当に沖縄で集めた珍しいものはその場で保管することが研究者にとっては便利であり、かつ、沖縄の財産になると思う。

また、標本を保存していくことと、外から集められるのかという点で、私たちの活動の中でも抜け落ちているのが、今ある博物館との連携の部分である。本当は今ある大きな博物館 10 か所ぐらいときちんと連携しないと博物館の運営ができない。ほとんどの博物館はこの活動がどこまで進んで、沖縄県がどう思っているかが分からないので、その連携が取れば標本の件はうまくいくと思う。



【質疑応答】

Q 日本の標本を全て沖縄に集めるという考え方はあるのか。

A 東京は災害が多いため、博物館関係者は危険分散したいという考えをすごく持っている。そういう意味では国立が1つではなくて幾つかあって、ちゃんとそれぞれのところで収集する形がよい。ただ沖縄については、やはり特殊な場所であるため、沖縄の標本は少なくともちゃんと集めてほしいということは多くの関係者が考えている。

以上



【質疑応答】



【館内視察】



【館内展示】



【福岡空港にて】